

大学生のスマホの利用状況と学習意欲への影響

ガン 賢太 ステンリー

近年、スマートフォンは急速に普及してきた。平成 28 年度版通信白書によるとスマートフォンの所有率は 2010 年の 10%から 2015 年には 70%を超えるまでになっている。また、従来のコミュニケーションツールである携帯電話と比べると、スマートフォンの方がインターネットの利用がしやすいという結果が出ている。さらに、先行研究から、大学生がスマートフォンを授業中や学習中に利用していることが集中力の低下に影響しているということや、スマートフォンを含めたインターネットの依存傾向にある人は身体的、精神的な健康状態がよくないということが述べられていた。

そこで本研究では、大学生がスマートフォンをどのような目的で、またそれをどれくらい利用しているのかによって学習意欲にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。

研究の方法としては、大学生を研究対象とし、筑波大学と日本大学工学部の学部生を対象として質問紙調査を行った。スマートフォンを所有しているか、またスマートフォンの利用状況と大学で学ぶことに関する学習意欲の調査を「ARCS モデル」という主に「注意」、「関連性」、「自信」、「満足感」の側面に着目したモデルを参考にして項目を作成した。そして、スマートフォンの利用目的を①無料通話アプリ(以下 LINE)でのチェック書き込み、②Twitter でのチェック書き込み、③Instagram でのチェック書き込み、④音楽鑑賞、⑤映像視聴、⑥ゲームの項目を用意し、利用頻度を(1)非常に利用している、(2)まあまあ利用している、(3)たまに利用している、(4)利用していない、の 4 段階に分けた。

今回の調査では Instagram をよく利用する生徒は、授業に積極的に参加はしているが、学ぶことへの関心と授業への親しみが薄くなるという影響を受けていることが分かった。さらに Twitter をよく利用している生徒は、大学での先生や、ほかの生徒と良い関係を築けている傾向にあることが明らかになった。これらのことから、今後の教育にうまく取り入れていくことで、生徒の学習意欲の向上につながるのではないかと考えられる。

(指導教員 大澤 文人)